

(研究主題) 対話の力をつける段階的な取組

(副題) ～対話的な力は15分で身につける・スタートカリキュラムへの取組～

静岡県静岡市立富士見小学校 教頭 深山 孝之

1 主題設定の理由

子どもたちが、対話的な学習でアウトプットすることに興味をもち、できるようになれば、子どもが自信をつけ、深い学びにつながるようになる。対話的な学習は様々な教科で友達との交流で自らの考えを深める場面で取り入れることが多い。ただ、対話的な学習は子どもたちが自主的に行う行為ではなく、様々な形態で経験を積み、慣れることによって成立する学習なのである。

そのために、学級で対話的な学習を成立させる形態や雰囲気形成させる必要がある。従って、教師が子どもたちにきちんと段階をおって指導し、対話的な学習が効果的に成り立つように導きたい。そこで、誰でも、どんな学年でも、どこでもできる段階的な授業実践をもとにした対話的な学習のやり方を全職員に提案した。さらに、2年間の対話的な学習の取組の研究で、対話的な学習をスタートカリキュラムに取り入れることで、入学当初の1年生の学習環境への不安の解消、学校生活への期待を感じる学習の実践につながり、小中一貫教育で継続することで大きな力になる可能性も得られた。

2 実践の概要(令和元年度の実践)

- (1) 対話的な学習の時間の設定
- (2) 対話の力は段階的に15分間で身につける
- (3) 対話的な学習での子どもたちの反応・変容
- (4) 令和元年度の成果
- (5) 対話的な学習の時間をスタートカリキュラムの中に位置づける(令和2年度の実践)

3 研究内容

(1) 対話的な学習の時間の設定(令和元年度の実践) <資料1>

① 対話的な学習の考え方

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、誰もが自分の思いを表現できるような楽しい対話ができる場を設定する。本来「対話」は2人組、隣同士という場合に使うが、本校では、子どもたちの聴く、話す、コミュニケーション能力の向上につなげる取組として、ペア(2人)トリオ(3人)クインテット(5、6人)ハーフ(学級の半分)オール(全員)という人数での話し合いも対話と呼ぶ。

主体的に考え、対話を繰り返し行うことで様々な表現方法を経験し、自分を表現することに興味をもつようになる。表現できることは自分の存在感を得ることになり、自信につながる。さらに、自分を様々な方法で表現することで、自分とは異なる他者の考えにふれ、自らの見方や考え方を変容させていく。対話を通して、自らの考えを変容させていくことで自分が深く学んでいることを実感でき、満足感、成就感、達成感につながりその子のさらなる自信になっていく。先にも述べたように、対話的な学習は、自分自身に自信をもつことが最終的な目的である。さらに、対話的な学習が他の教科指導の場面で生かされることで子どもが見方が広がることが期待できる。

② 対話的な学習の進め方

(ア) 対話的な学習として毎週月曜日(8:15~8:30)の15分の国語のモジュール時間を活用する。

(イ) 対話を実践する時に子どもたちのモチベーションを上げるために、始まりにはアイスブレイクタイムを設ける。じゃんけんを行ったり、ビンゴを実施したりすることで仲間意識を高め、明るい雰囲気で行うことができる。

(ウ) 対話を協働的な活動と位置づけたため人数構成は、その場の特性や発達段階に応じて、まずは、隣同士等のペア、次に、トリオ、クインテット、ハーフ、最後にオール等、段階別に実践していく。

(エ) テーマは基本的には教師が設定するが、高学年においては子どもから出てきたものでも良い。自己紹介的なこと、クラスの中で問題となっていること、身近なこと、普段の生活の中で起きたこと等、話すことに抵抗がないような題材にすると意欲が高まる。レベルアップとして、1枚の絵を見て題名をつける、テーマをもとに1枚の絵を仕上げる、賛成・反対が明確に分かれる二者択一の子ども

たちが興味をもつようなテーマ等で行うことも可能である。

③ 対話的な学習の教育課程での位置づけ（令和元年度は3年生での実践）

3年の国語の時間に位置づける。15分が1授業なので、3回で1時間扱いとなる。令和元年度は11時間を活用した。それぞれの学年で「話す、聴く」を取り上げた単元や話し合いを設けるような時間をモジュールでの対話的な学習の時間として位置づけたい。学年の実情に応じて時間を設定する。

(2) 対話の力は段階的に15分間で身につける

① まずはペアトークから<資料2>

ペアでの対話では、対話の基礎を学ぶ。対話を通して、アウトプットすることに慣れ、話し方、聴き方のスキルを学習する。話す人は、自分の考えを相手に伝えること、聴く人は「目を見る」「うなずく」「なるほどと言う」等を練習する。ここでは気楽に楽しめる対話の楽しさを体験する。低学年はペアトークが中心となる。

② トリオからハーフでトークまで<資料3><資料4><資料5>

トリオでは、ファシリテータを決めてつなげた意見を交わし合う対話を行う。トリオなので、賛成、反対、自分の考えとの違いを感じる場を設定することができる。友達の違う考えにふれることで自分の考えを深めたり、変容したりすることが可能になる。「話す・聴く」を通して、言葉を交わすことの楽しさを体験する。どの学年の子どもたちにも、自分の意見とは違う人とのふれあいが自分を高める機会となる。

クインテットでは、お互いの考えを聴きながら、自分の考えを深めていく姿が見られる。考えが対立する場面では、お互いの考えを交互に話すことで、自分の考えを強く主張することもある。最後に結論を出すことや多数決をとることもあり、複数での対話を楽しむことができる。中学年から高学年では様々な考えを整理したり、二者択一のどちらかを選んだりする場面等、今までの対話の経験を生かして、聴くことを大切にする姿勢が見られる。また、他のグループからどんな意見が出たのかを交流して、違う意見にふれることで、視野がさらに広がっていくことになる。

ハーフでの対話では、友達の言葉を使ったり、賛成反対と自分の立場をはっきりさせたりする意見が出る。二者択一の問題は立場が明確になるので、自分の考えに責任をもつことにもなる。自分以外の多くの考えにふれたい、多くの人数でアウトプットを経験したいという時には効果的である。中学年では子どもがファシリテータを務めるのが難しい場合は、教師が務めるようにする。高学年ではファシリテータを育てる場にもなる。

③ オールでトーク<資料6>

オールでトークでは、対立する意見を採り上げて、自分の立場を明確にすることで、対立することは対話になることを感じていく。今までの対話の積み重ねで子どもたちから意見の差異についての問題提起がされることもある。お互いに意見が違う時こそ、対話のチャンスであるという意識が芽生えてくる。全体で意見が言えない子も自分と比較しながら聴いたり、自分の意見を変容させたりすることを認めていく。ここで経験したことは、どの学年になっても対話の経験として生かされる。

④ 他の教科で活用する

対話の学習で身につけた力は他の教科でも活用できる。算数の時間での解答を導き出すためのやり方の吟味をペアトークで行った。「自分の考えはこうだけど、どうかな?」「それもそうだな、なるほど。」と自分の考えを変容させる姿も見られた。道徳の時間ではクインテットで対話を行った。どちらの行動が正しいのか?という二者択一でのその子の心を揺さぶるような投げかけに、友達との感じ方の違いにふれて、悩み、迷う子どもの姿が見られた。

⑤ 対話は話すことだけではない（絵で描く）<資料7>

対話は話すことがアウトプットの中心になりがちだが、話すことが苦手な子どもは絵を描いたり、動作で表したりするような、様々なアウトプットの方法を体験する場を設ける。自分ができるアウトプットの方法を知ること、対話は言葉だけではないことにふれ安心する姿が見られた。

(3) 対話的な学習での子どもたちの反応

① 振り返りの時間の設定

時間の終わりに必ず振り返りの時間を設定する。振り返りの感想もアウトプットである。、「楽しかった」「いい考えがあった」というような抽象的な感想ではなく、具体的にどう感じたのかを短い文で書き表す。学習が進んでいくと、短い言葉で自分の感じたことを表現できるようになる。次の時間に感じ方が表れている感想を紹介して、書くことへの自信につなげる。

形式	お題	K子さんの振り返り
ペア	好きな食べ物は何？	隣の人が <u>目を見て笑顔で聴いてくれてうれしかった。</u>
ペア	選択肢から1つを選ぶ	好きな物が <u>一緒でも好きな所が違うから</u> もっと好きになれた。
トリオ	宿題は必要か？	人の意見を聴いて <u>ちよつと迷ったけどやっぱり必要だ。</u>
トリオ	一番強いジャンケンは何？	1人は一緒で1人は反対で <u>反対の意見を聴いてそんな意見もあるんだな</u> と感じた。
トリオ	夏はこれが一番（絵）	夏の物が一緒でも <u>理由が違うから相手の理由もなるほど</u> と思った。
クイン ネット	係活動は必要か？	相手の意見に反対と言った時 <u>目を見て聴いてくれて話しやすくて自分も真似したい</u> と思った。
ハーフ	くん、さん付けは必要？	相手の目を見て聴いていると <u>なるほど</u> ということがたくさんあって <u>やっぱり聴くことが大切だ</u> と思った。
ハーフ	予定帳はきれいに書く？	意見が変わった人がいて意見が <u>伝わったの</u> ですごく感じた。
オール	絵を見て感じたこと	1回だけ言ったけど <u>反対やすごいね</u> と言われてうれしくてもっと言いたくなった。
オール	コロナ感染症でもオリンピックは開催した方がいい？	<u>対立が対話になる</u> ことがわかって対話が楽しくなった。

② 1年間の振り返り

対話の時間は、「話す・聴く」特に聴くことの訓練の場として大変有効であり、子どもたちのアウトプットの力をつけることにもなる。4月から始めて2月までの間に、子どもの「話し方」「聴き方」「友達との関係」に変化が出てくる。1年間の振り返ることによって、自分が対話にどう立ち向かってきたのかを見つめ直す機会となる。アウトプットすることの価値を自分できちんと言葉で表すことで、自分の特性を知り、次の学年につなげることにもなる。

K子さんの7月と3月の振り返り
(7月)対話の12の質問に肯定的な回答が <u>4つ</u> 。色々相手の気持ちを聴いたり、自分の気持ちを伝えたりしてその理由や気持ちがわかった。
(3月)対話の12の質問に肯定的な回答が <u>8つ</u> 。相手の意見に対して、 <u>同じ、反対、賛成が言えるようになった</u> 。前よりたくさん聴けるようになり、対話が楽しくなってきた。

(4) 令和元年度の3年生の実践の成果

① 対話には正答がなく、失敗がないので「聴く、話す」ことへの子どもたちの意欲が高まった

今まで授業の中で発言することが苦手だった子やなかなか自分の考えをアウトプットできなかった子が、段階的に対話的な学習を進めることで少しずつアウトプットすることに抵抗がなくなってきた。

話ができなくても様々な表現方法があることが認められることで、自分らしさを発揮することを可能にした子もいる。

② 他の教科へとつなげることができた

対話的な学習の15分間は対話をすることが目的ではなく、この時間で身につけた力を他の場面で活用することでさらなるその子の可能性の芽を伸ばすことを目指していた。

③ 子どもの可能性の芽をのばすことになった

教師が子どもを主体として見守ることの大切さを実感できたことで、子どものよさを引き出し、可能性の芽を伸ばすことになった。また、全時間の指導案や子どもの成長への価値付けをまとめたファ

イルをすべての職員に配布することで、誰もがどこでもできる対話の行い方を伝えることができた。

(5) 対話的な学習の時間をスタートカリキュラムの中に位置づける（令和2年度の1年生での実践）

段階的な対話の取組により、子どもたちが安心して学ぶことができること、アウトプットする力は訓練すれば身につくこと、対話的な学習は様々な教科をつなぎ総合的な学習の力をつけることができることが実証された。＜資料8＞

そこで令和2年度はなるべく早い時期から対話的な学習の基礎を身につけ、小学校6年間で対話的な力を確立するために、小学校入学当初の1年生に取り入れることを考えた。スタートカリキュラムとして4月～7月まで（コロナの影響でスタートは6月となった）で、対話的な学習を取り入れ、子どもの戸惑いの解消や楽しい学校生活を送るために必要な力を身につける実践に取り組んだ。

6月－対話の意味を知り対話を楽しむ時間（人に伝わるように話す。興味をもって聴く）の徹底

7月－対話の様々なやり方を体験し、話すこと聴くことの楽しさを味わう（聴く側の反応の紹介）

9月－合科的で横断的な対話の学習（図工 体育 学活）

10月－対話の経験を生かした対立、二者択一への挑戦

11月以降はペアからトリオへと人数を増やした対話に挑戦していく計画を立てた。

対話の方法は、令和元年度と同じように朝のモジュール15分間を活用する。スタートカリキュラムではペアでの対話に慣れていく。アイスブレイクで気持ちを盛り上げた後、対話の実践をする。

（主な対話的な学習のお題と他の学習とのつながり）

6月－自己紹介、好きな食べ物、好きな勉強、私の宝物

7月－犬が好きか猫が好きか？ 男が得か女が得か？ おいしいものは最初に食べる？最後？

9月－秋と言えば（図工：絵で表す）、ジェスチャー（体育：動き）で表現する

10月－そうじは黙ってやるのか、しゃべっていいのか（学活：クラスの問題点を出し合う）

ペアでの対話なので安心して楽しく話すことができた。話すことができない子もいたが、相手の話を聴くことで話し方を学んでいた子もいる。絵を描いたり（図工）、ジェスチャー（体育）で伝えたりすることも対話の一つであり合科的な学習として位置づけることもできた。また、アウトプットでは聴き手が大切であることを繰り返し伝え、うなずいたり、拍手をしたりする姿も見られた。さらに、質問したり、ちょっと違ふと反論したりする子もいたので、全体に紹介し様々な聴き方にふれるようにした。対話的な学習の基礎ができたことで小中一貫教育として継続的に推進していけば、アウトプットが積極的にできる子どもたちの育成につながることを期待できる。

4 成果と課題

(1) 成果

・対話的な学習は段階的で計画的な取組により、アウトプットの力をつけていくことができることが実証された。3年生では、ペアからオールまで様々な体験が自分らしく表現する方法を自分自身で身につけることができ、自分の自信につながった。

・対話的な学習を入学時のスタートカリキュラムに取り入れることで対話の基礎を作り、無理のない時間設定で小中一貫教育9年間を通して、積み重ねていくことで確かな力になることが期待される。

(2) 課題＜今後の対話的な学習の可能性＞

今後は、対話の場面が構想されるような単元をとおした合科的で横断的な授業構想にまでつなげられることを目指したい。すべての授業で対話的な学習を行うことは難しいが、教師が意図をもっていれば、対話の場面が子どもの考えを深めることになる。さらに、スタートカリキュラムの段階的な活動形態が全校で共有されるような計画を作成したい。まずは、教師が意図をもった対話的な学習に取り組めば、子どもが自分らしさに気が付くことができ、自分に自信をもつことにつながっていく。教師が対話的な学習に魅力を感じ、子どもから学ぼうという気持ちをもって取り組むことができれば、「話したい、聴きたい」という子どもたちの姿を見ることが出来る。さらに、教師への啓蒙の仕方、浸透するための様々な方法を考えたい。